特別企画

産官学連携で取り組む 学生参加型による がん検診の受診率向上施策

Symposium

静岡県内を中心に、予防医療を展開する聖隷福祉事業団保健事業部。同事業部では、2019年度より聖隷クリストファー大学と連携し、AYA世代(15から39歳の思春期・若年成人)を対象に、女性のがん検診啓発活動を行う「SGE♥プロジェクト」※を設立し、さまざまな活動を行ってきた。さらに今年2月からは、浜松市のがん検診担当部門から「子宮頸がん検診クーポンの利用率向上に向けて一緒に活動したい」との依頼を受け、その実現に向けた取り組みを展開している。本企画では、このプロジェクトに参加したステークホルダーに、座談会形式でプロジェクトの概要やそれぞれの役割、取り組みを通じて得たものなどを振り返っていただいた。

司会：池田孝行さん[聖隷福祉事業団 保健事業部 総合企画室 室長 兼 聖隷予防検診センター 事務長、医療経営士2級]

※S：聖隷、G：gynecology(婦人科)、E：enlightenment(啓発)に対して♥(愛)を持って行動する

出席者

- 聖隷福祉事業団　保健事業部
  - 【総合企画室】
    - 池田孝行 さん
    - 松村和樹 さん
  - 【営業契約室　営業契約課】
    - 今村綾子 さん
    - 宮澤佳那 さん
- 聖隷クリストファー大学　看護学部
  - 【教員】
    - 若杉早苗 さん
    - 氏原恵子 さん
    - 村松美恵 さん
  - 【学生】
    - 鈴木琴那 さん
    - 寺田朋華 さん
    - 神谷美里 さん
    - 芝原杏奈 さん
- 浜松市健康福祉部　健康増進課
  - 鈴木久仁厚 さん
- 株式会社Ｃｉｅｎ
  - ヘルスケア担当　横垣祐仁 さん

池田●「SGE♥プロジェクト」(以下、SGE)ではこれまで、AYA世代をターゲットとして、「楽しい！　婦人科検診啓発プロジェクト」をコンセプトに、学生参加型プロジェクトとしてさまざまな活動を行ってきました。この取り組みの様子は、『月刊 医療経営士』2020年12月号にも寄稿させていただいたところです。

そして今年2月、浜松市がん検診担当部門から「子宮頸がん検診クーポンの利用率向上に向けて一緒に活動できないか」との打診を受け、新たな取り組みがスタートしました。具体的な活動内容を振り返る前に、自己紹介を兼ねてSGEのどの部分にかかわったのかをそれぞれ教えてください。

芝原●聖隷クリストファー大学看護学部3年の芝原杏奈です。SGEのなかでは、子宮頸がんのモジュール作成を担当しています。

神谷●同3年の神谷美里です。SGEのなかでは現在、子宮頸がんの啓発動画の作成にかかわっています。

鈴木(琴)●同2年の鈴木琴那です。神谷さんと一緒に子宮頸がんの啓発動画の制作にかかわっています。

寺田●同2年の寺田朋華です。私は、芝原さんと同じく子宮頸がんの啓発のモジュール作成を担当しています。

鈴木(久)●浜松市健康福祉部健康増進課ウエルネス推進担当課長を務めています鈴木です。今回、当市の子宮頸がん検診クーポンの利用率を高めるため、SGEとの連携をお願いしました。この事業は、私が所属する健康福祉部と産業部の両部でかかわって進めています。

今村●聖隷福祉事業団保健事業部営業契約室の今村綾子です。事務局としてすべての活動に携わっています。

宮澤●同じく宮澤佳那です。今村と一緒にこれから事務局として活動していきますので、よろしくお願いいたします。

松村●同じく総合企画室の松村和樹です。池田とともに企画部門として活動に携わっています。

若杉●聖隷クリストファー大学の公衆衛生看護学領域で教員をしている若杉早苗です。学生側の事務局という役割で、大学で学生と保健事業部とのやりとりやSGEの活動全般の指導を行っています。

氏原●同大学看護学部の氏原恵子です。専門は成人看護学領域です。学生たちがSGEの活動に臨むにあたり、子宮頸がんという疾患についてきちんと知ったうえで取り組むことができるように支援しています。

村松●同大学の村松美恵です。母性看護学を専門としておりますので、婦人科系検診に関するプロジェクトということで携わらせていただきました。

横垣●株式会社Ｃｉｅｎ(旧・たびらく)のヘルスケア担当として参加した横垣祐仁です。当社はＬＩＮＥを使ったチャットのサービスを展開しており、ヘルスケア分野、特に健康診断やがん検診の受診率向上に活かしています。浜松市の20年度実証実験サポート事業として、「ＬＩＮＥ等のＤＸを活用した子宮頸がん検診受診率向上施策」に取り組んでいます。

AYA世代への啓発を目指した 学生参加型のプロジェクト

池田●最初に、SGEのスタートを振り返りたいと思います。

今村●当事業部の聖隷予防検診センターでは、以前から女性スタッフが中心となって「女性検診推進プロジェクト」を立ち上げ、地域住民に向けた啓発活動などを行っていました。そのなかで、AYA世代への啓発を推進するためには、同じ年代であり、将来医療に従事する学生との連携が効果的ではないかと考え、19年9月、池田とともに本日お越しいただいた聖隷クリストファー大学の先生方に主旨の説明に伺い、翌10月から学生参加型の共同プロジェクトを発足することになりました。

発足からこれまで、当事業部の看護スタッフによる大学での子宮頸がんに関する出張授業の実施や学園祭での婦人科検診啓発のブース出展、市と連携した住民向け啓発活動の実施、人間ドック健康食の共同開発といった多様な活動を

行ってきました。

若杉●以前から聖隷予防検診センターと当大学の保健師を目指す学生のコラボレーションは実施しており、そのなかで、学生が学んだ知識を他の人に伝えていく機会を持つことは、教育的にも非常に有効だと感じていました。ただ、そのような場はなかなかないため、声をかけていただいてすぐ賛同しました。

氏原●私は成人看護学領域で子宮頸がんの治療を受ける患者さんの看護の授業を担当していますが、授業のなかでがん検診の受診率が低いことや、HPVワクチン接種が滞っていることが大きな問題であると伝えてきました。今回、そのような課題に対し学生自らが解決する場を提供いただける非常に良い企画であると感じ、喜んで協力させていただきました。

プロジェクトに参加する聖隷クリストファー大学看護学部の学生

村松●在学中の学生が社会人と一緒に活動できる機会をいただけるのは非常にありがたいと思いました。SGEは、実習生という括りではなく、実際の保健活動のなかで保健師や看護師と一緒になって企画から実施までのプロセスを経験できる貴重な体験の場であり、大変感謝しています。

宮澤●公衆衛生の授業でのこれまでの取り組みに対する紹介や、アドバイザー制度での担当学生からの声がけなどで興味を持ち、自主的に参加された学生も多いと聞いています。

池田●学生の皆さんはこれまでの活動にどんな感想を持たれていますか。

神谷●印象に残っているのは、聖隷予防検診センターで保健師の方に子宮頸がんについてインタビューをしたことです。実際の検査キットなども見せていただき、自分たちが子宮頸がんについて知らなかったことを理解でき、友人を含め、同世代の女性たちに伝えるべきことがたくさんあると感じました。

芝原●子宮頸がん検診について自分も学ぶ場になっているのと同時に、自分が同じ世代の人たちに知識を伝えたり検診をすすめることができる貴重な場だと思っています。最初の頃に比べると現在は行政や企業などさまざまな方がかかわり、重大なプロジェクトになっていることが大きな喜びです。

子宮頸がん検診の若年層の受診率の低さが課題

池田●次に、今回の啓発活動の依頼をいただいた経緯について、浜松市の鈴木さんから説明をお願いできますか。

鈴木（久）●浜松市は昨年度から、「浜松ウエルネスプロジェクト」を実施しています。これは官民が連携してさまざまなソリューションを提供し、市民の健康寿命の延伸を図るとともに、ヘルスケア事業を展開する産業を育成・支援する事業です。このプロジェクトの一環として、産業部の実証実験サポート事業があります。全国のスタートアップ企業から浜松市の課題解決につながるソリューションを募集し、採択した事業を実行するというものです。昨年度、子宮頸がん検診の受診率向上というテーマで事業を募集したところ、株式会社Cienの横垣さんからLINEを活用した啓発活動の提案があり、採択しました。実施にあたり、対象が若年層の女性に向けた内容であることから、池田さんから聞いていたSGEと連動できないかと考え相談、提案しました。

子宮頸がん検診の受診率向上をテーマに設定した理由は、若年層の受診率の低さという浜松市の課題を解決したいという思いからです。当市の子宮頸がん検診の受診率は昨年度、20代10・7％、30代17・8％、40代38・2％、50代34・5％、60代18・7％、70代7・8％、80歳以上は1％となっていました。20代のなかでも20～24歳は9・2％にとどまっています。市では20歳の方に対して子宮頸がん検診が無料で受けられるクーポンを郵送しているのですが、送付数約3700枚に対して、昨年度実際に検診を受けたのは500人弱でした。

会場とオンラインのハイブリッド形式で座談会を開催

市としても各分野でDXを進めているなか、これまでのようなクーポンの郵送だけでは受診率は上がらないと考えており、今回のようなデジタル技術の活用が検診受診率の向上につながれば、今後他のがん検診の受診率向上にも波及的な効果が期待できると考えています。

横垣●若年層の子宮頸がん検診の受診率の低さはどの自治体でも課題です。届いた無料クーポンを開封し、実際に受診する方がどれくらいいるか、また、検診の受診勧奨においてデジタル化が進んでいないという課題もあります。こうした状況を変えていくために今回、LINEというプラットフォームを活用しました。20～30代の約9割が利用しているLINEは、いかに若い世代に検診に関する情報をリーチできるかを考えた際に、非常に有効なツールだと考えています。

私事ですが、実は私はがんサバイバーです。がんが見つかった時、ステージⅣでした。幸い今は元気になっていますが、経験者の立場から言うと、がんという病気は情報戦です。知識がないゆえにつらい思いをしている人がたくさんいるので、DXによってそういう人を1人でも減らす一助になればと考えています。

今回のプロジェクトは、全国的にも例を見ない、非常にありがたい体制で取り組めています。活動のなかで学生の間で「子宮頸がんの検診を受けるにあたり、LINEで何ができたらいいか」というアンケートをとっていただき、どんな情報提供がターゲット層に刺さるのかなど、貴重な意見をもらっています。また、受診のインセンティブについても同様です。「サービスで辛いラーメンがついたらうれしい」という意見を見て、私たちとは感覚がまったく違うことに驚きつつ（笑）、いろいろと勉強させていただいています。

学生の声を活かしてプロジェクトを推進する

池田●今回のプロジェクトでは、①浜松市の子宮頸がん検診クーポンおよび送付用封筒のデザイン刷新、②LINEを活用した受診率向上のための啓発――の主に2つに取り組みました。

まず、デザインの刷新については、先生方から「シンプルすぎて若い人は開封する気にならないね」と辛口なコメントがあったことを覚えています。また、社会人であれば一般的に使う「親展」という言葉を『親が展く』ものだから自分には関係ない」と思う学生がいたという話がとても印象的で（笑）、社会人経験がない若い世代の方に、もっとわかりやすい表現にしなければならないのだと実感しました。

若杉●私たちも、「公共料金の請求書と変わらない」「誰宛てかわかりにくく、学生は開かないかもしれない」と感じていました。封筒のデザインにかかわるということは形に残りますし、学生の意見が浜松市の公的なものに採用されるという大きなチャンスを与えていただいたと考えています。

寺田●私はまだクーポンが届く年齢ではないのですが、自分たちがデザインを考えたクーポンが同世代の方々に届くというのはとても

うれしかったですし、より多くの人が検診を受けてくれるようになったら良いと思います。

松村●封筒は、以前は濃いオレンジ色でモノクロ印刷だったものを、明るい色を使用したカラー印刷に変更されました。さらに、「浜松市から20歳のあなたへ」と明示したり、「あなたの未来を守るため」「〝今から〟検診を受診しましょう」といったメッセージが入っています。また、クーポンもイラストなどを活用し、わかりやすくなりました。

池田●かなり変わった印象ですが、実際、届いた方からの反応はどうでしょうか。

寺田●正直なところ、以前の封筒はあまり開封しようと思えませんでしたが、変更後のデザインは開封して中を見てみようという気になりました。開けてからも、説明が図やイラストで説明されていてすごく読みやすかったです。

神谷●友人に感想を聞いてみたのですが、「持ち物がパッと見てすぐわかった」「資料が読みやすかった」「イラストに統一感があった」といった声があがり、同世代にもわかりやすくなったと感じました。ただ、なかには「すでに親に捨てられてしまった」という友人もいたので、今後の課題として封筒をより多くの人に開封してもらえるようにしたいと考えています。

芝原●浜松市内で1人暮らしをしている友人に聞いたところ、「浜松市から20歳のあなたへ」というキャッチコピーを見て、「自分宛てに届いているものなのだ」と印象に残ったと話していました。ただ、「子宮頸がん検診を受ける大切さはわかるものの、なかなか行動に移せない」という意見もあり、さらにもう一歩行動を後押しできる働きかけができたらと思っています。

リニューアル前

リニューアル後

クーポン送付用の封筒のデザイン

鈴木（久）●封筒とクーポンに関してはまだまだ改良の余地があると考えています。ですが、「捨てられてしまった」など受け取った方の率直な声を聞くことができるのはありがたい。そもそもこのような生の声を聞けるのは、SGEの皆さんがいるからであり、今回依頼をして本当に良かったと感じています。

池田●今回は、鈴木（久）さんはじめ浜松市の方々に柔軟な対応をいただいたことが大きな成功要因だと考えています。また、受診者を受け入れる健診機関側の意見も反映されたことに大変感謝しています。続いてLINEの取り組みについて、横垣さんお願いできますか。

横垣●今回の提案では、LINEを使って検診を受けたくなるような啓発を行うこととしました。具体的には、市から受診勧奨やアンケート、クーポン配布、各種お知らせなどが行えるようになっています。また、検診対象者はLINEで受診方法の確認、問い合わせ、各種相談ができるようになっています。また、チャット・オペレーター対応の管理システムによって、会話・対応の記録、受診状況、行動変容レベルなどの対象者情報管理が可能となっていて、市の担当部門が内容を随時把握できる仕組みです。

先ほど申し上げたように、SGEの皆さんの意見が目からうろこで、とても参考になっています。本格稼働したのは今年6月からのため具体的な成果が見られるのはこれからですが、引き続き浜松市やSGEと連携しながら、より良いシステムづくりに取り組みたいと考えています。また、この取り組みをきっかけとして、他のがん検診の分野でもDXを進めていければと考えています。

鈴木（琴）●私はLINEのアカウントをつくる段階にかかわりましたが、「画面が無機質に感じる」「タップですぐ病院検索の画面に移動すると予約につながりやすいのではないか」など、さまざまな意見やアイデアを私たちから出しました。特にビジュアル面がみるみる親しみやすい雰囲気に変わっていく過程を見られたことは、活動している実感が湧いてうれしかったです。

この活動にかかわるなかで、自分や同年代の人が検診を受ける必要があることを改めて実感しました。学生視点でのSNSの運用など、検診の必要性を同世代の方々にもっと理解してもらうための活動にかかわることができてとても良かったです。

氏原●学生たちは忙しい学業の合間をぬって積極的にかかわっていた印象があります。コロナ禍で人が集まるイベントなどは行えなくなりました。そのようななかでも、昨年の学園祭では自発的に検診受診の啓発動画を作成するなど、切れ目なくメッセージを伝え情報を発信し続けるという使命感が私たち教員にも伝わり、サポートのしがいがありました。学業の傍らそうした経験ができたことは、今後社会に出ていく際に大きな糧になると期待しています。

鈴木（久）●今回の実証実験サポート事業についてはどのような成果が出るのかをきちんとモニタリング、来年度以降どのように活動をするかを判断していきたいと思います。

また、私が言うことではないかもしれませんが、今回のような企画を持つことが学生にとっての学びの場となれば大変うれしく思います。そういうことを学んだ学生がこの浜松市からたくさん出てくれば、がん検診の受診率もおのずと上がっていくのではないかと期待しています。

座談会終了後に行われた記念撮影。司会は写真左端の聖隷福祉事業団保健事業部の池田孝行さん（医療経営士2級）が務めた

産官学による「共創」で地域課題の解決、価値創造へ

池田●最後に、今後の活動について考えをお聞かせください。

神谷●今後は、子宮頸がんの患者さんが集まる患者会などに参加して、私たちの活動にアドバイスやご意見をいただきたいと思っています。また、そこでうかがった話をわかりやすくまとめて、小学校や中学校、高校に出向き、さまざまな世代に向けて子宮頸がん検診の普及に向けた啓発活動を行っていくことができればと考えています。

若杉●当初は私たち教員や、保健事業部の皆さんから「こういうことをしてみない？」と働きかけていましたが、今では学生たちが自らアイデアを出し、意欲的に取り組むようになってきました。それはとてもすばらしいことだと思っていますし、私たちは知識や場、予算面などを含め学生の主体的な動きを支えていきたいと考えています。

今村●今後は、これまで以上に学生のみなさん自らが発信できる場を提供したいと思っています。学生が中心になって、同世代の皆さんに情報を伝えていくことが重要だと思っていますので、行政や企業など各種団体の方と柔軟に連携しながら活動を展開できるよう支援していきます。

池田●さまざまな地域資源との連携、特に今回、SGEが浜松市、企業などと連携し協力体制を構築できたことは、大変幸せな経験でした。この地域の未来を担う学生の皆さん、そして将来お子さんやお孫さんの世代までの健康を守る仕組みとするため、長期的視点を持って取り組みを進めていきたいと考えています。

今回の取り組みを通じ感じたのは、お互いが利他の精神を持ち、課題を共有するために言葉の定義を合わせ、見える化し議論することの重要性です。これによって参加者全員の共感が生まれ、競争ではない「共創」ができると強く感じました。今後もSGEの活動をここの皆さんと一緒に強力にバックアップしていきます。本日はありがとうございました。